



筑紫女学園大学リポジット

平安時代経絵の空間表現 : 愛媛大山祇神社所蔵
の紺紙金字法華経并開結見返絵

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 知美, OGATA, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/51

平安時代経絵の空間表現

～愛媛大山祇神社所蔵の紺紙金字法華経并開結見返絵～

緒 方 知 美

Spatial Expressions of Frontispiece Paintings of Sutras Made in the Heian Period

Tomomi OGATA

はじめに

1 大山祇神社本について

- ・ 現状
- ・ 画題
- ・ 表現形式と制作年代

2 平安時代経絵の空間表現

- ・ 構図による空間表現の変化
- ・ 経絵の空間表現～「定型」再考

むすび

はじめに

執筆者は平安時代絵画における自然景観表現に関心をもち、この問題を考えるため、釈迦説法図や説話図の背景として豊富な自然モチーフを含み、かつ現存作例の多い紺紙金字法華経見返絵(以下、経絵と呼ぶ)の研究に着手し、これまで経絵の絵画表現とその制作背景の両面から考察を加えてきた¹。

本論でとりあげる大山祇神社所蔵の紺紙金字法華経並開結²は、法華経8巻と開結経が、欠巻はあるとはいえ一具のものとして比較的良好な状態でのこる作品として貴重であり【図9】、その表紙・見返絵の型にはまらない自由な表現が、類型的表現が大部分を占める平安時代の紺紙金字法華経作品群の中で際立っていることがすでに指摘されている。実際に、大山祇神社本にふくまれる仏菩薩を描かず自然景観を大きく取り込んだ空間表現はきわめて印象ぶかい【図1】。本論では、実地調査をもとに大山祇神社本の表現形式に検討を加え、その特徴を明らかにし、本作品の平安時代経絵全体における位置づけを考えたい。その考察過程で、平安時代の経絵研究の基礎概念となっている「定型」の意味について再考する。

1 大山祇神社本について

・現 状

愛媛県越智郡大三島町宮浦に鎮座する大山祇神社³の所蔵する紺紙金字法華経並開結は、現在、巻第一と六とが欠失し、その他の8巻が1具として保管されている。

本作品の伝来に関する史料としては、大山祇神社所蔵の『御鎮座本縁並寶基傳後世記録』⁴がある。本史料中、鎌倉時代の元亨二年（1322）の兵火による社殿焼失後に残った宝物を記したうち、「神宮寺の院内の仏供所・読経所・経蔵等に漸く相残る品」として合計16巻の紺紙金泥経典が記されている⁵が、そのうち筆頭に挙げられる「高倉院御筆の紺紙金泥法花経一部、同御筆の同じく無量義経、同御筆の同じく観普賢経」にあたる可能性がある。さらに同史料の元禄4年（1691）11月22日の宝蔵・経蔵の建立後、「経蔵に相納まり候分」として元享度と同じ16巻を挙げ、そのあとに紺紙金泥経典が1巻追加され、つづいて書き本と摺り本の大般若経以下、21種の紙本墨書経典が列挙されている。神宮寺関連の宝物を悉皆調査した結果⁶である。この2件の記録の伝高倉院筆本が本作品に当たるとすれば、元亨2年（1322）以前に本社に伝えられたと考えることができる⁷。

本作品は、表紙・見返はややうすい紺色、本紙は全体に濃い紺色で紙によってやや濃淡が見られる。表紙・見返絵は、一部破損はあるものの8巻分すべてが残り、金銀の発色もよい。

軸首は金銅製撥形で無文である。後補とみられるが、軸首のうち、巻第七上下、巻第四と観普賢経の片方は欠失している。巻紐もすべて欠失している。巻末の紙と軸が離れている巻がある。

経文は、紺紙に銀泥界線を引き、1行17字の金字を書く。紙の品質は薄く張りのある上質なもの、法量や銀界や金字などからみて、8巻が1具であることに問題はないと判断される（【表1】「大山祇神社本紺紙金字法華経並開結法量」参照）。書体は多様で、平安時代の写経体のものが多いが、なかには素人風の書体も含まれる。同一巻に1人から3人の手が認められる巻もある。本作品には、巻第五巻末に朱で「全紙十八枚半表紙半切」とあるほかは制作年や作者を示す奥書はなく、制作にまつわる史料も見出しえない。本紙には紺紙墨書が随所に確認された⁸。

表紙には、平安時代の紺紙金字経に通例の宝相華唐草文を金銀泥で描くが、その形式は類型化せず流麗である【図10】。大きなカーブを描く茎の輪郭を明瞭に描き、変化に富んだ形態の花を2、3顆づつ配している。翻る葉、卷蔓とも萎縮せず大ぶりで、文様全体に連続した流れが感じられる。平安時代の紺紙金字経典の表紙絵は、9世紀の写実的な唐風の唐草文様が、12世紀半ばには文様のな形式に変遷するが、本作の表紙絵は、そのような類型化以前のおおらかな構成である。中尊寺金銀一切経⁹の一部には本作品と近似した表現が見いだせる【図11】。

見返絵は、紺紙に銀泥の二重枠を巡らせたなかに金銀泥で描かれている。銀泥枠は当時の紺紙金字経見返絵に通例であるが、枠の上下外側に金泥の卷唐草文を描くのはめずらしく、本作品のほかには、中尊寺金銀字一切経と金字一切経の一部、そして東北大学附属図書館所蔵の零本の法華経巻第八¹⁰にみいだせるのみである。表現を詳細にみると、複数の画師の分担によると考えられる。しかし全体の素材の質や表現の統一は保たれているため当初からの一具と考えてよいだろう。画師の違いについてはのちに触れる。

・画題

各巻に描かれる法華経主題は以下のとおりである。

無量義経【図1】：徳行品の船行。

巻第二【図3】：(釈迦説法図)、比喻品の火宅三車。

巻第三【図4】：(釈迦説法図)、薬草喩品の三草二木。

巻第四【図5】：法師品の高原穿鑿、宝塔品の宝塔涌出と菩薩涌出。

巻第五【図6】：(釈迦説法図)、提婆品の仙人給仕、龍女出現。従地涌出品の菩薩涌出。

巻第七【図7】：不軽品の常不軽受難。嘱類品の仏手摩頂。

巻第八【図8】：普門品の諸難救済（漂流船、雷神、須弥山墜落）。

観普賢経【図2】：普賢菩薩来儀。

以上のように、本作品に描かれる説話画題に関しては、すべて平安時代の見返絵に定着していたものであるが、1画面に描く主題の数が少ないこと、また、通例では全巻に描かれる正面向き釈迦説法図を省略する画面のあること、が特徴である。

・表現形式と制作年代

構図

本作品の表現形式を考察するにあたり、まず、平安時代の経絵の表現形式を概観するため、その基礎をなす構図の分類とその時代的分布変遷過程を把握しておきたい（【表2】「平安時代紺紙金字経典見返絵の構図分類」参照）。

平安時代の経絵は、構図の中心をなす釈迦説法図の配置により、釈迦説法図が斜め向きに画面の端におかれるもの（A）、正面向き説法図が画面中央におかれるもの（B）の2系統に分類される。Bの構図が数の上で主流派であり、須藤弘敏氏がこの構図を平安時代の「定型」として定義づけ、これが経絵研究のための有効な基礎概念として広く用いられている¹¹。須藤氏が明らかにされた経絵の様式展開によれば、延暦寺銀字本¹²【図23】に代表されるAグループは大陸本直摸の系譜であり、百済寺本¹³【図25】に代表されるBの定型グループは、11世紀にその画面構成の枠組みが選択され、12世紀半ばまでに様式的完成を遂げる。

本論では、上記の2系統のほかに、ここでテーマとする大山祇神社本のように説法図が省略される、或いは非常に小さく表される作品群（C）を別系統として立て、考察を進めたい。

Bの定型の典型とされる百済寺本【図25】は、画面を水平方向に三段に構成し、画面上方に遠山、中央に宝樹を背にした釈迦説法図、下方に説話図を表すという構成をとる。画面上方の遠山は三峰に分かれ、その中央の山頂を鷲の頭の形にして、霊鷲山を象徴的に表す。百済寺本では一具全巻がこの定型構図で統一されている。定型構図の特徴は、三段構成の各要素が遠景・中景・近景をなし、画面中央に大きく描かれた正面向き釈迦説法図が画面の重心をなす安定した空間構成にある。

大山祇本では、8画面のうち3画面（巻第二【図3】、同三【図4】、同五【図6】）において正面向き釈迦説法図が描かれているが、あと2画面（巻第四【図5】、同七【図7】）は釈迦を画面の

端に寄せ、のこり3画面（開経【図1】、巻第八【図8】、結経【図2】）では全く描かれていない。全体の半数以上の画面で、説法図を端に寄せたり省略したりしている。大山祇本8画面中5画面は、構図の上で定型を逸脱している。

画 風

まず、本作品の画師の違いについて触れておく。本作品は表現形式からは少なくとも3群に区分ができる。以下、構図、仏菩薩と樹木モチーフ、そして画面上方の一文字の描法に着目してみてゆく。

第一群（巻第二【図3】、同三【図4】）は、標準的描写の画風である。定型的な構図で、正面向き釈迦説法図が描かれる。説法図の背後の宝樹は縦に長くのびる形態で、画面下方の説話図のモチーフは簡略化され形態が崩れている。樹木の描写は素朴で、経絵の定型にきまって描かれる下草は描かれない。画面上方には、定型に共通してみられる金泥の横一文字がくっきりとはかれる。

第二群（巻第四【図5】、同八【図8】、結経【図2】）は、画面上方の片方のあく構図、或いは対角線構図をとる。仏菩薩は肩幅が狭めで四肢のふくよかな童子のような体つきである【図16・図17】。説話の人物モチーフなどの描写は簡略ながら的確である。山や崖の表現は、短線を並べる部分と金泥の平面を組み合わせる。遠山は円弧をかさねて、そのうえに特徴的な笠形の遠樹を配している。近景の樹木は、松と広葉樹のほかに、縦に伸びる枝に点描の葉を重ねていく特殊な形のものがある。下草を二種（葉が車輪形をなすものと縦に並ぶもの）描く。画面上方に左側から右にいくにつれて薄くなるように一文字をはく。

第三群（開経【図1】、巻第五【図6】、同七【図7】）は、画面上方の中央や片方のあく構図、或いは対角線構図をとる。豊満な肉身に金泥で隈をつけふくよかさを強調する仏菩薩描写が特徴で、衣にも段隈ふうに金泥をはく【図12】。宝樹は葉・羅網ともにふっくらとしていて、銀泥の細かな点描で瓔珞を描写する。とくに樹木表現にすぐれ、枝を横にひろげた先に楕円形に葉のならぶ広葉樹の描写には安定した筆力が確かめられる【図22】。画面上方の一文字はほとんど目立たない。

この画師の3群の区分はさらに細分化できるかもしれないが、今は、複数の手になることと構図や描法の差異が明らかに認められることを確認しておくにとどめたい。

平安時代の経絵の表現は総じて、精祖の差が大きく、画風も多様であるが、本作品のように一具の法華経において構図や描法の多様性を際立たせている例は珍しい。12世紀の経絵の典型的画風は百済寺本において認められ、その百済寺本と同一工房の作と考えられるものに、長福寺本金光明経（久安元年〈1145〉）¹⁴、五島美術館本阿弥陀経（久安5年〈1149〉平忠盛筆）¹⁵があげられるが、これらの作品では複数の画師が統一的表現で一具を制作していることが指摘されている¹⁶。本作品の型にはまらないやわらかさは、定型構図を固執しないことに加えて、各巻の表現が形式的統一を目指していないことに原因があるようである。

モチーフ描写

本作品の釈迦【図12】は、下頬のふくよかな顔、大きめの頭部、量塊性のつよい体軀をもち、輪郭は細めである。百済寺本の釈迦【図14】は、球形の顔、のびやかな体、肩と膝の大きく張った堂々とした体をもち、輪郭線は太く均一で安定している。本作品の仏描写は、金剛峯寺本（天永4

年〈1113〉¹⁷【図13】の量塊的な姿から、百済寺本の堂々とした姿【図14】、厳島神社両筆本（承安2年〈1172〉）¹⁸【図15】の胴の長い細身の姿への変遷の上では、百済寺本よりも金剛峯寺に近く、本作品の細めの描線も、百済寺本の経絵の典型といえる太めで張りのある線より遡ると思われる。

本作品の菩薩【図16・図17】は、頭部が大きめでなで肩の童子らしいふくよかな姿で表される。とくに説話の中心モチーフではない部分で、デッサンの狂いを気にせずに略筆で表わされた部分では、その童子らしさを単純化ゆえに凝縮した形で見ることができるが、このような菩薩表現は中尊寺交書一切経中に近似例が見いだせる【図18】。

その他のモチーフは、たとえば巻第二の三車火宅喩の火宅の焰を省略し、3車を2車のみで表す【図4】など、仏教説話図としては重要と思われるモチーフの変更が見られる一方で、無量義経の舟行の画題に和装の女性を描くなど【図1】、世俗モチーフの追加が見られる。

岩や土坡などの描法については、金泥線で輪郭し、内部を平面塗りし、崖の側面に短線をならべて表す、という経絵に通例のものである。しかし百済寺本などの定型見返絵に典型的な太めの輪郭線と泥の平面的塗りによるメタリックな効果を強調した工芸的表現ではなく、細めの輪郭線と泥のぼかし塗りによるやわらかな絵画的表現である。

以上のモチーフ描写の検討から、本作品について、金剛峯寺本（天永4年〈1113〉）から12世紀半ばの百済寺本までの間すなわち12世紀前半の制作と考えることができる。

ここで、本作品の経絵の定型を逸脱する要素に関し、平安時代の鑑賞的絵画と比較してみたい。

まず、本作品に用いられている、画面情報の中央または片方の空いた構図、或いは対角線構図については、12世紀後半の宮廷絵師の作とされる伴大納言絵詞の画中画の障壁画に、同じ上方のオープンな構図を見出すことができる【図19・図20】。経絵通例の略筆によらず、丁寧に描かれた広葉樹の形式と描法も共通している【図21・図22】。開経の頭上運搬をする和装の女性とその後ろを追う犬のモチーフ【図1】が一遍聖絵などの絵巻にしばしば見出されることはすでに指摘したとおりである¹⁹。

本作品は、その手慣れたモチーフ描写から、経絵制作に習熟した画師の手になると推定されるが、構図やモチーフ描写における世俗画との共通点や、あまり例のない見返の銀泥枠外の巻唐草文や、頭光をフリーハンドで描く点などを考慮すれば、12世紀からその存在が確かめられる僧綱経師²⁰や、おそらく彼らを中心としていたであろう工房など、畿内中心の活動が推定される経典を組織的に制作していた専門化の進んだ作者とは異なる画師によって制作されたのであろう²¹。

2 平安時代経絵の空間表現

・構図による空間表現の変化

平安時代の経絵の変化を、構図の分類ごとに分けてみると、斜め構図のAグループ【図23】は9世紀から、正面構図のBグループ【図24・図25】は10世紀末からみえ11世紀には両者が併存するが、12世紀には後者が主流となり、この系列の中で経絵の定型が成立した。その空間表現を比較すると、前者では遠景へとモチーフの収斂する奥行きのある空間が、後者では遠景を抽象化して近景の土

坡や洲浜を俯瞰して描く平面的な空間表現が特徴である。では、構図の3分類のうち、特に自然景觀描写に富むCグループの空間表現はどのようなであろうか。

Cグループ²²に含まれる与田寺本²³【図26】、大山祇神社本【図29】、興聖寺本²⁴【図28】、比較対象として定型の百済寺本【図25】、装飾経の浅草寺本²⁵【図27・30・33】の画題と表現形式をみたい。

画題については、5作品すべて定着主題を選ぶ。画題数では、百済寺本、大山祇本、与田寺本、興聖寺本、浅草寺本の順で少なくなる。構図については、定型の靈鷲山をそなえた三段構成をとり、中央に正面向き釈迦説法図を描くのは、百済寺本では一具10巻のうち9図、大山祇本と与田寺本では3図、興聖寺本と浅草寺本では1図と減少する。

それぞれの作品の空間表現をみよう比較のため同じ巻第八をとりあげ、図様の不明瞭な作品については描き起こし図を作成した。

定型の百済寺本【図25】では、画面上方に配されたかすみに浮かぶ遠山により遠くへの視線が遮られ、画面の中ほどまで引き重ねられた金銀の泥刷きによって地の広がり強調されるが、中央の正面向き説法図が画面の重心となって、その周囲にちりばめられた海難、須弥峯推落、二童子神変3画題の説話モチーフを統一空間内に結び付けている。

与田寺本【図26】では、百済寺本と同じ3画題が描かれるが、説法図が画面の端に寄せられるため散漫な印象の空間となっている。

大山祇本【図29】と興聖寺本【図28・31】では同様に説法図が省略され、海難と須弥峯推落の2画題を描くが、モチーフの数と大きさの違いによって画面の充実度に差が生まれている。

このようにCグループ3作品では、定型の百済寺本において画面の重心となっていた正面向き釈迦説法図を縮小または省略しているため説話の背景となる自然景觀が目立つが、遠山と土坡を構成要素とする空間構成の基本は、百済寺本と共通している。

大山祇本においてとくに目立つ自然景觀重視の性格は、宮廷画師の手になると考えられる装飾経見返絵において顕著に認められるものである。浅草寺本【図27・30】では、広々とした自然を舞台に、須弥峯推落の画題だけが描かれるが、遠くからの俯瞰構図が大山祇本のそれと近い。本論文の冒頭であげた、大山祇本開経の仏菩薩を描かない世俗画のような画面【図32】と浅草寺本同巻【図33】の構図の近似は顕著である。

定型の百済寺本以前に大山祇本のような自由な構図をもつ作品がつくられていたこと、しかもその大山祇本に、正面向き説法図を描く標準的構図によるものと、宮廷画師による浅草寺本と共通する自由な構図をとるものが共に含まれていることは着目される。経絵の標準的画師と、宮廷絵師の影響を受容できる画師が共同して経絵の定型成立への道を築いたということになる。

・経絵の空間表現～「定型」再考

ここで「定型」という概念について考え直したい。これまでの考え方では、経絵の様式展開、定型の完成とその後の類型化の過程という一筋の流れとしていたように思う。「定型」という用語に含まれる「型」という語が、あたかも密教図像の場合のように、規範となる図が厳密に写し継がれる状況を想起させる。しかし実際のところ、Bグループのうち同一工房と考えられる作品間においてさえ、説話モチーフの細部描写における意図的变化が確認され²⁶、Cグループの作品群にい

たつては、類型としての把握が困難になるほど説話描写が多様である。しかしそれにもかかわらず、遠山と金銀泥刷きの土坡からなる絵画の「地」としての空間表現は「定型」のそれが共有されている。

この「地」としての空間表現こそ、平安時代経絵の最も重要な絵画的要素であるといえるのではないか。いわゆる「定型」とはそのような特徴的な「地」と、限定的説話モチーフから成る定型化傾向のある「図」の組み合わせであるといえる。そしてCグループの作品群から確認されたことはこの「図」は交換可能な要素であるということである。

むすび

平安時代の経絵について、時代を降るにつれ尊像の体軀が小さくなり、それに代わって説話図が強調される性格が見て取れることを石澤法子氏が指摘されている²⁷。しかし、大山祇本にみられる、画題の数の少ない、しかもモチーフの縮小や省略や写し崩れの認められるあいまいな説話表現については、説話性の重視という言葉だけでは言い尽くせない。

Aグループの斜め構図の源となる中国の経絵は、合理的空間構成のなかに經典内容の説話の網羅的図解を組み込んだ、小画面説話画様式を完成し、その形式が唐時代から版本化され、東アジアの経絵の規範として踏襲された。

それに対し平安時代の経絵は、「定型」で確認されたように、遠山とニュアンスある地面の広がりをも構成要素とした空間構成に、限定された説話モチーフを組み込む方向で展開した。金銀泥の泥刷きを重ね、水辺や低い崖をつくり、下草を配した地面の表現は、大陸本にはない平安時代経絵特徴である。複数の大陸本から影響を受けている本興寺十卷本²⁸【図34】においても、この要素は取り入れられている。説話画の説話モチーフ描写の「図」の部分と共に、その舞台である「地」の表現において、平安時代の経絵作者は試行を重ねている。

平安時代の経絵の定型では、近景の存在が画面の手前の枠をつくり、中景の存在が主題がそこで展開しうる空間をつくり、遠景が奥行きを暗示する。このような空間構成と説話描写の相互のバランスが、平安時代の経絵の様式的達成点ではないか。この達成は、宮廷画師から、専門化した経画師も含む僧侶にいたる幅広い画師達の間で最大公約数的表現といえよう。外的規範による窮屈さとは異なる内発的自由さをそなえた、草々とした性格の経絵様式はその意味で、紺紙金字經典見返絵という限定のなかで生みだされた、このジャンル独自の様式であるといえる。

¹ 拙稿「紺紙金字法華経見返絵と仏功德蒔絵経箱装飾画」（『デアアルテ』第10号、2004年3月）、同「平安時代の経絵の作者について」（『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号、2006年1月）、同「平安時代の経絵と釈経」（『同』第6号、2011年1月）。なお、本稿は、江上綏氏による平安時代山水画研究を目的とした装飾経の表紙・見返絵研究の成果によるところが大きい。

² 奈良国立博物館編『法華経一写経と莊嚴』（1987年）で紹介されている平安時代から鎌倉時代にかけての44件の紺紙金字經典（法華経・開結）のうちに含まれている。ほかに本作品を紹介した書籍としては、大山祇神社編集発行『大山祇神社』（1985年）、『同 改訂版』（1998年）がある。

- ³ 旧官幣大社。大三島神社ともいう。大山積神を祀る。天平神護2年(766)従四位下から、貞観17年(875)に正二位に累進、延喜の制名神大社に列せられ、のち伊予国の一宮となる。後一条天皇寛仁元年(1017)一代一度の大神宝大奉幣を受け、その後源氏・北条氏・足利氏・大内氏などをはじめ領主・藩主らの尊崇篤く、国主越智氏、豪族河野氏の氏神として崇敬された。〔是澤恭三「大山祇神社項目解説」(『国史大辞典』2、吉川弘文館)より抜粋、一部改変。〕
- ⁴ 宝暦4年(1754)祝越智安屋編。国学院大学日本文化研究所編『大山祇神社史料 縁起・由緒編』(2000年3月)所収。
- ⁵ 「高倉院御筆の紺紙金泥法花経 一部
同御筆の同じく無量義経 一巻
同御筆の同じく観普賢経 一巻
弘法大師筆の紺紙金泥法花経 一巻
同筆の同じく無量義経 一巻
同筆の同じく観普賢経 一巻
伝教大師筆の仁王経下巻 二軸
頼朝御筆の紺紙金泥般若心経 一巻」(注4前掲書30～31頁に原文、86～88頁に訓読)
- ⁶ 注4前掲書50～51頁に原文、101～108頁に訓読。
- ⁷ 『大山祇神社文書目録 第1集』(愛媛県教育委員会編、1985年3月)に宝物関係の古文書として53件、『大山祇神社文書目録 第2集』(愛媛県教育委員会編、1987年3月)27件があげられている。その中に複数の宝物目録が含まれており、本作品の伝来確認のため、今後目録の調査を進めたい。
- ⁸ 赤外線写真撮影により本紙全巻にわたる66箇所に墨書・墨印が確認された。すべてが紙の天地部分に、その半数以上が紙裏面にある。墨書・墨印については今後の研究課題としたい。
- ⁹ 中尊寺金銀交書一切経、4296巻、天治3年(1126)供養、和歌山金剛峯寺所蔵(ほかに観心寺・東京国立博物館所蔵)。
- ¹⁰ 紺紙金字法華経巻第八、1巻、平安時代12世紀、東北大学附属図書館所蔵。
- ¹¹ 須藤弘敏「平安時代の定型見返絵について」『仏教芸術』136号、1981年5月。
- ¹² 紺紙銀字法華経、8巻、平安時代9世紀、滋賀延暦寺所蔵、重要文化財指定。
- ¹³ 紺紙金寺法華経并開結、10巻、平安時代12世紀、滋賀百済寺所蔵。
- ¹⁴ 紺紙金字金光明経、4巻、久安元年(1145)奥書、京都長福寺所蔵。
- ¹⁵ 紺紙金字阿弥陀経、1巻、久安5年(1149)平忠盛奥書、五島美術館所蔵。
- ¹⁶ 藤弘敏注11前掲論文。
- ¹⁷ 紺紙金字法華経并開結般若心経、11巻、永久2年(1114)比丘尼法葉願文、和歌山金剛峯寺所蔵、重要文化財指定。
- ¹⁸ 紺紙銀字法華経并観普賢経、9巻、嘉応2年(1170)～承安2年(1172)平清盛・頼盛奥書、広島厳島神社・石川石黒氏所蔵、重要文化財指定。
- ¹⁹ 注1前掲論文「平安時代の経絵と釈経」参照。
- ²⁰ 経師の僧綱補任の初例は大治4年(1128)の尋意の法橋補任である。注1前掲論文「平安時代の経絵の作者について」参照。
- ²¹ 中尊寺金銀交書一切経の一部に、本作品と表紙・見返絵ともに近似した画風が認められることは示唆に富む。
- ²² Cグループには、本論で考察対象としている大山祇本の表現形式と共通性が認められるもの以外に、一主題のみ描くもの、ミニアチュール風のもの(常德寺本、金峯山寺本一品経)などがある。
- ²³ 紺紙金字法華経并開結、10巻、平安時代12世紀、香川与田寺所蔵。松岡明子「与田寺の絵画」『与田寺調査』(『歴史博物館整備に伴う資料調査概報 - 平成7年度 - 』香川県教育委員会)参照。
- ²⁴ 紺紙金字法華経并開結、10巻、平安時代12世紀、京都興聖寺所蔵。
- ²⁵ 金箔散色紙法華経并開結、10巻、平安時代11世紀、東京浅草寺所蔵、国宝指定。江上綏氏は、浅草寺本の箔散らしの技法と画題選択と表現から12世紀の制作とする新説を提示された。しかし本論では、古様な書体、繊細な画風ともに11世紀様式としてとらえうとする従来の説による。江上綏「浅草寺所蔵国宝法華経の見返し絵」『国華』1282号。
- ²⁶ 注1前掲拙稿(2006年)参照。

²⁷ 石澤法子「本興寺所蔵十卷本紺紙金字法華経見返絵について」『日本女子大学大学院 人間社会研究科 紀要』第10号、2004年。

²⁸ 紺紙金字法華経并開結、10巻、平安時代12世紀、静岡本興寺所蔵。

〔図版出典〕

図11,18 高野山霊宝館編集発行『経絵の美術』（1987年）図58,41。

図13・24,15,23,34 奈良国立博物館編『法華経一写経と莊嚴』（1987年）図55,59,50,61。

図19,20,21 黒田泰三『小学館ギャラリー新編名宝日本の美術 第12巻 伴大納言絵巻』（1991年、小学館）。

図30,31,33 筆者による書き起こし

上記以外は筆者撮影。

〔附記〕

本稿は、2003年3月に実施した作品調査にもとづく研究成果の口頭発表「大山祇神社所蔵の紺紙金字法華経并開結～経絵にみる平安時代の自然景観表現～」(法華経絵の研究会、2011年9月11日、於金沢大学角真キャンパス)をもとに、2011年10月の再調査を経て成ったものである。調査をご快諾いただ大山祇神社ほか作品所蔵先各位のご理解とご高配に感謝いたします。

(おがた ともみ：アジア文化学科 講師)

【表1】大山祇神社本紺紙金字法華経並開結法量

巻名	巻第二	巻第三	巻第四	巻第五	巻第七	巻第八	無量義経	観普賢経
見返高	25.6	25.6	25.5	25.6	25.6	25.6	25.6	25.6
天界高	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4
地界高	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.5	0.3	0.5
見返幅	21.7	21.6	21.6	21.6	20.9	21.8	22.7	21.5
本紙高	25.4	25.6	25.6	25.6	25.6	25.7	25.7	25.6
天界高	2.8	3.1	2.9	2.8	2.9	2.8	2.7	2.9
地界高	3.3	3.1	3.4	3.5	3.4	3.5	3.6	3.4
界高	19.3	19.4	19.3	19.3	19.3	19.4	19.4	19.3
界幅(10行)	18.1	18.3	16.7	16.8	18.1	16.8	16.7	16.9
第1紙継幅	47.4	47.3	47.5	47.3	47.2	49.3	49.3	49.4
第2紙継幅	49.2	48.9	48.9	50.7 (うち 1行分別 紙：幅1.9)	49	51.2	50.1	51
第3紙継幅	49	49.1	49	48.8	48.8	51.2	50.9	51.2
第4紙継幅	49.1	49.1	49.1	48.8	48.8	51.1	51.1	50.8
第5紙継幅	48.9	48.9	49.1	48.8	48.8	51.4	51.1	50.9
第6紙継幅	48.8	48.8	49	48.8	48.7	51	51.1	51
第7紙継幅	48.8	48.9	49	48.9	48.8	51.1	50.7	50.8
第8紙継幅	48.8	48.8	48.8	49	48.6	51.2	50.9	51.1
第9紙継幅	48.8	48.8	48.7	49	57.4	51	51	50.8
第10紙継幅	48.9	49.1	49.1	48.8	57.7	51.3	51	50.9
第11紙継幅	48.9	48.8	49.2	48.9	57.5	51.8	51.1	50.9
第12紙継幅	48.8	48.8	49.2	48.8	57.5	47.5	50.8	51.1
第13紙継幅	48.8	48.9	49.1	48.8	57.2	21(軸含む)	49.1	50.9
第14紙継幅	48.8	48.8	56.9	48.8	57.2		49.1	48.8
第15紙継幅	49	48.8	56.9	48.8	17.5		49.2	17.7
第16紙継幅	48.7	48.7	56.9	48.7			40.3	
第17紙継幅	48.7	56.8	33	48.5				
第18紙継幅	48.7	56.9		54.8				
第19紙継幅	48.7	56.3		22				
第20紙継幅	48.7			10.2				
第21紙継幅	57							
本紙全長	1032.5	950.5	839.4	917.2	750.7	609.1	796.8	727.3

【表2】平安時代紺紙金字法華経見返絵の構図分類

構図	法華経作品		法華経・紺紙金字経以外の作品		
	所蔵	時代 ※備考	所蔵	経典題目	時代 ※備考
A 斜め向き 釈迦説法図が 画面の端に置 かれる	延暦寺銀字本	9世紀	金勝寺	金光明経	9世紀
	ホファー氏本	9世紀			
	仁和寺本	11世紀	醍醐寺	般若波羅密多経 卷第十七	11世紀
	本興寺八卷本	11世紀			
	東北大学図書館本	12世紀			
	奈良博本一字宝塔経	長寛元年(1163)			
	本興寺十卷本	12世紀			
B 正面向き 説法図が画面 中央に置かれる	金峯神社本	長徳4年(998)	神光院本	般若心経	9世紀 ※本文紫銀字、 表紙・見返紫紙 金銀泥
	金剛証寺本	11世紀			
	延暦寺交書本	11世紀			
	金剛峯寺本	永久2年(1114)	中尊寺金銀交書 経のうち一部	一切経	天治3年(1126) 供養
	輪王寺本	大治4年(1129)			
	庭野日敬本	保延6年(1140)			
	百済寺本	12世紀	長福寺本	金光明経	久安元年(1145)
	妙蓮寺本	12世紀	五島美術館本	阿弥陀経	久安5年(1149)
	浄光寺本	12世紀	神護寺経	一切経	久安5年(1149) 経中央銘
	高伝寺本	12世紀	荒川経	一切経	平治元年(1159) 供養
	大阪市美本	12世紀	ベルリン本	法華経	12世紀※小型経
	遍明院本	12世紀	厳島神社本	華厳経・大集経	12世紀
	唐招提寺本	12世紀			
	善通寺本	12世紀			
	松山寺本	12世紀			
	厳島神社甲、乙、丙、 丁、戊、己、庚本	12世紀			
	八銚神社本	長寛元年(1163)	善導寺	観普賢経	承安2年(1172)
	厳島神社両筆本	承安元年(1172)			
	京都国立博物館本	12世紀	厳島神社	金剛寿命陀羅尼 経	治承2年(1178)
	富山 個人本	12世紀			
	瀬川美術館本	12～13世紀	中尊寺金字経の うち一部	一切経	秀衡(-1187) 発願
	普門寺本	12～13世紀			
	賀茂別雷神社本	12～13世紀	東大寺	華厳経	建久6年(1195) 経師良厳調進
	鶴林寺本卷第四、八	12～13世紀			
C 説法図が 省略または非 常に小さく表 される	中尊寺金銀交書経 のうち一部	天治3年(1126) 供養※法華経説話	浅草寺本	法華経并開結	11世紀 ※見返色紙金銀 泥
	大山祇神社本	12世紀	興福寺	成唯識論	12世紀 ※見返紺綾金銀 泥水景
	常德寺本	12世紀			
	与田寺本	12世紀	矢代氏・服部氏 本	法華経卷第五・ 観普賢経	12世紀 ※表紙紫紙金銀 泥沢沼地、見返 説法・説話図
	興聖寺本	12世紀			
	金剛峯寺本一品経	12世紀			
	中尊寺金字経のう ち一部	秀衡(-1187) 発願※法華経説話			



图1 大山祇本 開經



图2 大山祇本 結經



图3 大山祇本卷第二



图4 大山祇本卷第三



图5 大山祇本卷第四



图6 大山祇本卷第五



图7 大山祇本卷第七



图8 大山祇本卷第八



图9 大山祇本法華經并開結



图10 大山祇本卷第七表紙



图11 中尊寺交書一切經表紙



图12 大山祇本



图13 金剛峯寺本



图14 百濟寺本



图15 巖島神社兩筆本

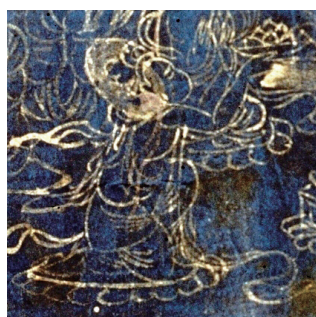


图16 大山祇本卷第四



图17 同左



图18 中尊寺交書一切經



图19 伴大納言繪卷第一卷

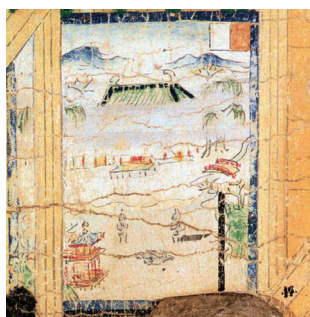


图20 同左



图21 同左



图22 大山祇本開經



図23 延暦寺銀字本



図24 金剛峯寺本



図25 百済寺本卷第八



図26 与田寺本卷第八

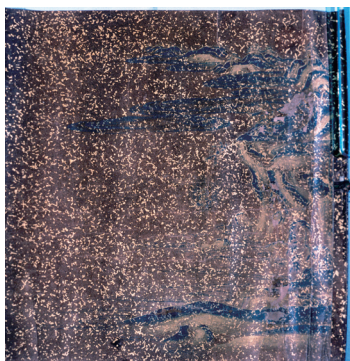


図27 浅草寺本卷第八

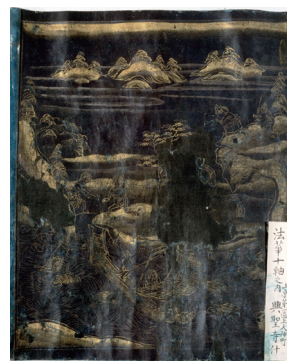


図28 興聖寺本卷第八



図29 大山祇本卷第八



図30 浅草寺本卷第八 描き起こし



図31 興聖寺本卷第八 描き起こし



図32 大山祇本開經



図33 浅草寺本開經 描き起こし



図34 本興寺十卷本開經

